

第88回麻布獣医学会 一般演題4

乳牛の乳房炎治療における乳汁細菌学的検査の有無と予後との関連

金子 宗平, 中谷 啓二, 市場 聖治, 竹内 泰造, 篠塚 康典 他

広島県農業共済組合連合会 乳房炎グループ研究会

1. はじめに

乳房炎治療での乳汁の細菌培養同定試験や薬剤感受性試験は、薬剤の選択など治療方針の決定への重要な情報源であり、近年、酵素基質培地をもちいた簡易迅速培養法による、臨床現場での細菌学的検査の重要性が複数報告されている。

しかし、細菌学的検査のコストに見合った治療効果が得られているかという国内の報告は無く、詳細は不明である。

そこで今回、乳房炎治療における細菌学的検査がどの程度予後に影響を及ぼしているか調査検討したので報告する。

2. 材料および方法

平成23年10月から平成24年12月の間に臨床型乳房炎と診断された乳用牛285頭を症状から3レベル(1:異常乳, 2:局所症状, 3:全身症状)に分類し、それぞれ乳汁の細菌学的検査に基づき治療する群(以下検査治療群)と、従来の見込み治療を行う群(以下empiric治療群)にランダムに分けた。

いずれも家畜共済の病傷事故給付基準に沿った治療を行い、最終治療後14日目以降にPLテストによって治癒判定した。各治療群と3レベルの治癒率をそれぞれFisherの直接検定によって比較検討した。

3. 成績

285頭のうち検査治療群は144頭(同定試験のみは90頭)、empiric治療群は141頭であった。検査治療群の治癒率はempiric治療群より有意に低く、乳房炎症状が重篤なほど顕著であった。各治療群において乳房炎レベル、発症日齢、発症分娩後日数と予後との関連は認められなかった。

4. 考察

乳房炎治療における細菌学的検査は治癒率に影響を及ぼさなかった。これは過去海外の複数の報告と一致した。

その重要な要因として、菌種に応じた治療方法が現在の病傷事故給付基準では設定しておらず、治療方針の自由度が治癒率向上の妨げになっていることと、治療終了の見極めが農家主導により行われているため、完治する前に治療が終了し結果的に再発、慢性化することだと考える。

いずれにしても、現在行われている治療では十分に検査結果が活かされているとは言えず、今後は検査結果を薬剤の選択のみではなく、原因菌別治療期間の設定根拠とするなど活用していきたい。

乳房炎発症初期での検査の励行と検査に基づいた治療方針の策定と実施の徹底が、今後の乳房炎防除に重要であると考ええる。